奈良・飛鳥京跡

1　所在地　奈良県高市郡明日香村大字岡
2　調査期間　第一五二次調査　二〇〇四年（平16）二月～三月
3　発掘機関　奈良県立橿原考古学研究所
4　調査担当者　松井一晃・十文字健
5　遺跡の種類　宮殿跡
6　遺跡の年代　飛鳥時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

飛鳥京跡の発掘調査は、一九五九年の第一次調査以来、継続的に行なわれており、三時期の遺構が重複していることが明らかにされている。古いものからⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期と呼ばれ、Ⅰ期は舒明の飛鳥岡本宮、Ⅱ期は皇極の飛鳥板蓋宮、Ⅲ期は斉明・天智の後飛鳥岡本宮、及び天武・持統の飛鳥浄御原宮と推定されている。中でも、Ⅲ期遺構はその様相が最も明瞭で、内郭とその南東のエビノコ郭とそれらを取り囲む外郭から構成されることが確認されている。しかし、外郭は部分的な調査しか行なわれておらず、その内容については不明な部分が多い。

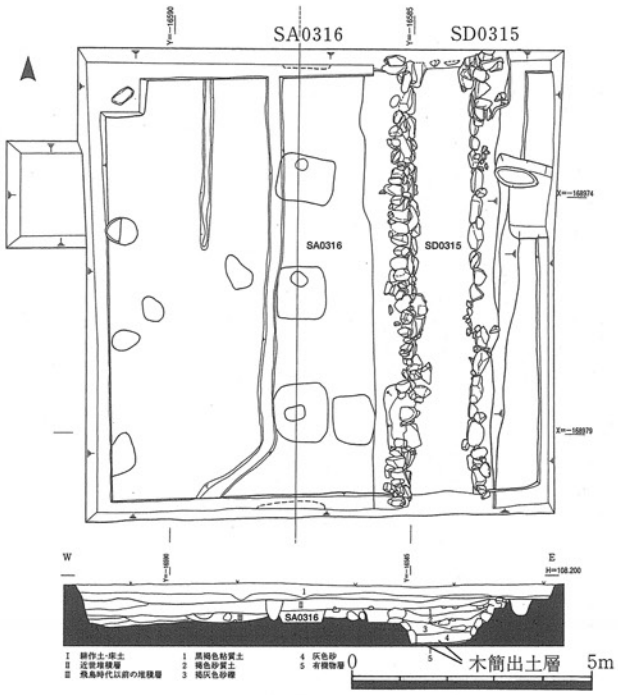
（吉野山）

第一五二次調査は、外郭に関する遺構、特にその北限の検出を目的とした学術調査である。調査地は、飛鳥川東岸に広がる南東から北西にゆるやかに下る平坦地にあり、Ⅲ期遺構の内郭部分と飛鳥寺との間に位置する。

今回の調査では、飛鳥京跡の北限を示す遺構は検出されなかったが、宮中枢の北部の状況が明らかになった。検出した主な遺構は、石組溝ＳＤ〇三一五とそれに平行する掘立柱塀ＳＡ〇三一六、それらの直上を覆う礫敷ＳＸ〇三一四である。ＳＤ〇三一五は北流する南北溝で、上面の幅約一・八ｍ底幅約一・一ｍ深さ約〇・六～〇・八ｍを測り、断面は逆台形を呈する。石組は、約〇・二～〇・六ｍの花崗岩を三段積み上げたもので、底には石を敷かない。溝の築造時期は明らかでない。出土土器が最下層から最上層まで全て飛鳥Ⅳ・Ⅴ期のものに限定されることから、溝は宮廃絶後、程なく埋没したと考えられる。これまでに飛鳥京跡の調査で確認されている溝でも最大級の規模で、飛鳥京内の水を集めて飛鳥川に排水する基幹排水路の一部であると考えられる。

木簡は、ＳＤ〇三一五の堆積土のうち、最下層の有機物が部分的に集中する砂層から四二五点（うち削屑四〇六点）出土した。共伴す

る文字資料として墨書土器と刻書土器がある。墨書は「水」が三点、「水取」が一点ある。「水」は「水取」の省略と考えられる。刻書は「岡本」である。尾張地方に類例があり、生産地を示す可能性が指摘されている。また、木簡出土層と同一層からは、定木などの木製品、種子などの自然遺物が多量に出土している。特に定木については、飛鳥時代のものとしては初めての完形品で、当該期の文書形態を解明する上で重要な資料といえる。



飛鳥京跡第152次調査遺構図

8　木簡の釈文・内容

(1)　川原□　160

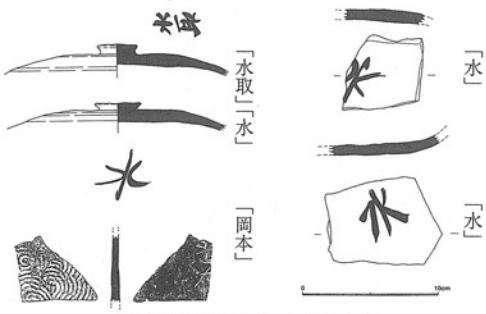
(2)　百□　160

(3)　御□　091

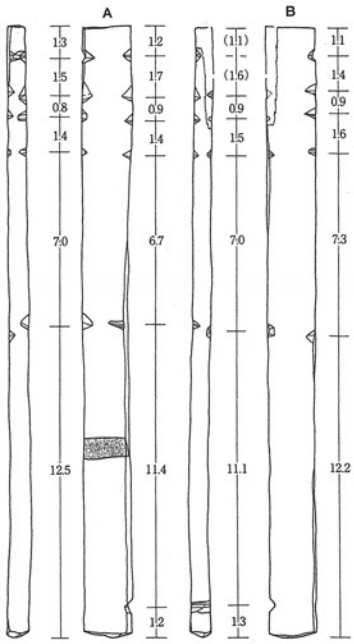
(4)　命□　160

(5)　□〔召カ〕人□　160

(6)　評　160



SD0315出土墨書・刻書土器



SD0315出土定木（数値は単位cm）

(7) 者　091

(8) 日□　091

(9) 大　091

(10) □国原□　091

(11) 丁□□　091

(12) ・野野□
・之之之　091

(13) ・之之之之□
・□□之之□□　091

(14) 小建　091

(15) 佐□　091

(16) □生　091

(17) □斗　091

(18) □乙□　091

(19) 大□　091

(20) 得　091

(21) □人　091

(22) 一□　091

(23) 志□〔侍カ〕□　091

(24) ・頓首謹白
・『□□寺寺寺』　(110)×(13)×3　081

木簡はほとんどが削屑や細片である。(6)は「評」字の上に文字は記されていない。(12)(13)は直接には接続しないが同一木簡の断片である。表裏に墨書があるが、厚さ一㎜足らずで、削屑の両面に小さな文字で習書したものとみられる。(14)の「小建」は天智三年（六六四）から天武一四年（六八五）まで施行された冠位の一つである。(24)は前白木簡の断片であろう。

9　関係文献

奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報　二〇〇四年（第二分冊）』（二〇〇五年）

（1～7・9十文字健、8鶴見泰寿）